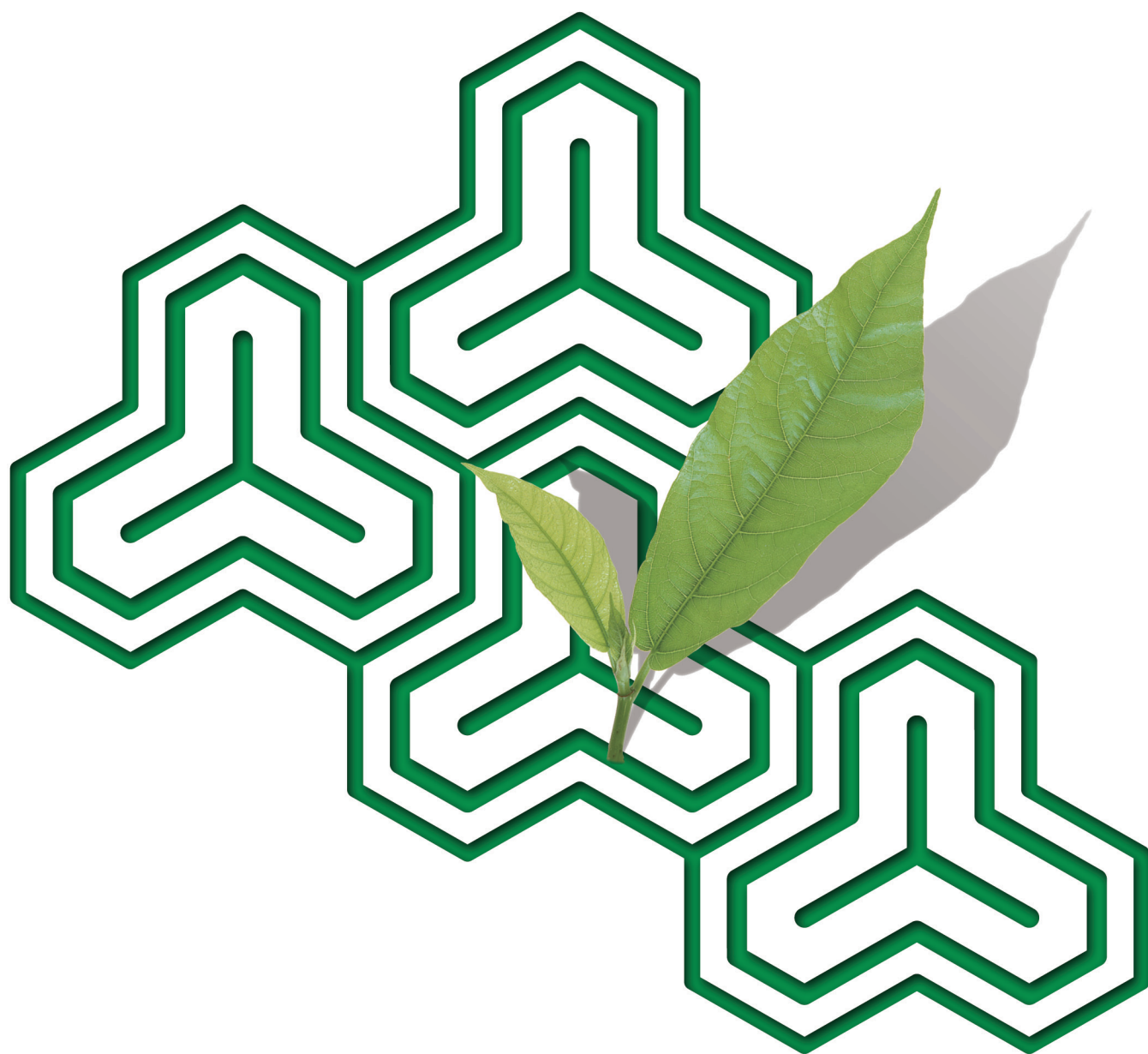




ザ・シチズンズ・カレッジ共催講座

12月14日 銀座フェニックスプラザ

『論語』は心のビタミン剤

日々の成長に直結する言葉に出逢う！先人から学ぶ成功法則

講師

安岡定子

1960年、東京都生まれ。漢学者・安岡正篤の孫。大人向け・子ども向けの論語塾、講演、研修、著書などを通して、『論語』を人生のテキストとして活かす啓蒙をしている。

生涯学習開発財団が共催する、ザ・シチズンズ・カレッジ第114期第5回講座が、12月14日、東京・銀座にて開催された。

今回のテーマは『論語』。儒教の始祖である思想家・孔子の言葉を、弟子たちが書にしたものだ。誰もが一度は、「子曰わく……」のフレーズを読んだり聞いたたりした経験があるはず。「昔の人は良いこと言ってるな、いつかちゃんと学びたいな」と興味を抱きつつも、漢文を日本語の古文に読み下し、さらに現代語に訳して理解するという複雑さから、遠ざかったままになっている人も多いのではないだろうか。

■幼稚園児から大人まで『論語』を素読

講師・安岡定子氏は（銀座・寺子屋子ども論語塾）を主宰し、全国25か所で定例開催している。論語を声に出して読む素読を中心とした、昔の寺子屋式授業だ。なぜ素読なのか。小学生に難しい漢字はわからなくても、読みがなが振ってあれば声に出して読めるし、音として憶えて帰ることができる。大人だって返り点や置き字を気にせず、ストレスなく読める。

この日の授業も、「子曰わく、吾十有五にして学に志し……」「子曰わく、故きを温ねて新しきを……」と、素読をしながら



孔子という人物や背景を学んでいた。

孔子は約2500年前に生きた人で、そのころの中国は春秋時代と呼ばれる乱世だった。なんとか戦乱を収めたいと思った孔子は、過去の良き時代を徹底的に学び、良き人物の育成が必須との結論に至る。まず自分が猛勉強し、役人として登用されると、外交面で上司を支えたり、優秀な弟子たちの活躍もあり名声を高めるも、50代半ばで失脚。十数年の諸国放浪後に故郷に戻り、古典の編纂や門弟の教育に尽くした。

「……民信無くば立たず」では、孔子の政治的信念がわかる。弟子の子貢が「統治に必要な、食、兵、民の信のうち止む終えず1つを捨てるなら」と質問し、孔子は「兵」と答えた。「さらに1つ捨てるなら」と掘り下げると、「食」と答えた。国防を棄てて侵略されても、経済が衰退しても、民の「信」さえあれば必ず復興できるというのだ。高い技術や法律も使う人の哲学次第。現在の日本ではそのバランスが崩れてきていると、安岡氏は警鐘を鳴らす。

■持って生まれた自分の善を磨く習慣

論語は約500章からなるが、そのうち「仁」の項目が100以上と最重視されている。誰もが優しさや思いやりを持って生

まれているという性善説で、それを磨いていくことが大事、国難の中にも仁を発揮できるのが君子であると説く。

江戸時代の寺子屋や藩校では、道徳心や強い精神を育むものとして論語の素読が奨励された。現在に至るまで各界の日本を代表する人物に影響を与えているほか、経済、遠慮、忠告、有鄰など、日本語として定着した言葉も多い。幼稚園児、20代、40代と、解釈はそれぞれ違ってもいい。良き師は良き習慣。音といっしょに体の中に哲学が入っていくのだ。

■ダイダイと引き込まれる魅力的授業

祖父で漢学者の安岡正篤は、まだ子供の定子氏に接する時も「あなたは どう思いますか？」と、一人の人間として扱ってくれた。学生時代に漢文のわからないことを質問したときは、書庫に行つて本を広げ、「これに答えがあるから読みなさい」とか、辞典の引き方を見せてくれたとか、答そのものではなく、わからない時にどう解決するかを教えてくれる人だったそうだ。

2015年に、日本通運の社外取締役に請われて就任した。数字に直接関わる立場ではないが、良き人材がいる企業が良き数字を生むとの考えのもと、配達員のマナー教育や女性幹部育成に携わっている。

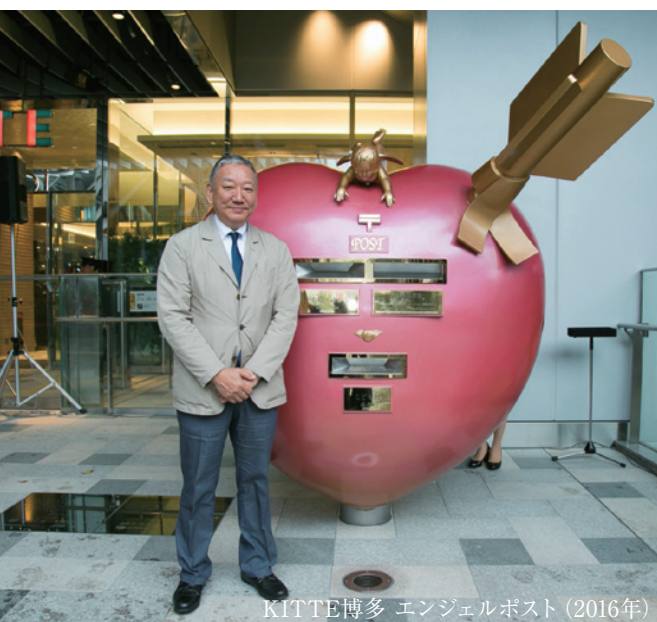
論語からの学びはもちろんだが、論語に触れている子どもたちの感動的エピソードや、何より安岡氏その人の魅力にダイダイ引き込まれる授業だった。その事実こそ、論語が人を育てる証ではないだろうか。

何を作ってもいいが、貧しくても最高の仕事をしろ

人形
中村信喬

Nakamura Shinkyō

1957年 人形師・中村^{まんが}衍涯の長男として福岡に生まれる
 1979年 九州産業大学芸術学部美術学科彫刻卒業
 1997年 伝統工芸人形展にて文化庁長官賞受賞
 1999年 日本伝統工芸展にて高松宮記念賞受賞
 2005年 福岡県文化賞創造部門受賞
 2010年 第1回金沢世界工芸トリエンナーレ招待作家
 2011年 伝統文化フォーラム賞優秀賞受賞
 ラ・ルーチェ展にてローマ法皇謁見作品献上
 2012年 日本伝統工芸展無鑑査認定
 金沢21世紀美術館 工芸未来派 招待作家
 2013年 日本橋三越特設画廊個展
 2015年 「菊池寛実賞 工芸の現在」展 ノミネート
 現在 日本工芸会理事、九州産業大学芸術学部非常勤講師



KITTE博多 エンジェルポスト (2016年)



希望の天使 (木彫、2013年)

左から4代目弘峰さん、5代目桃伯くん、信喬さんと一緒に。

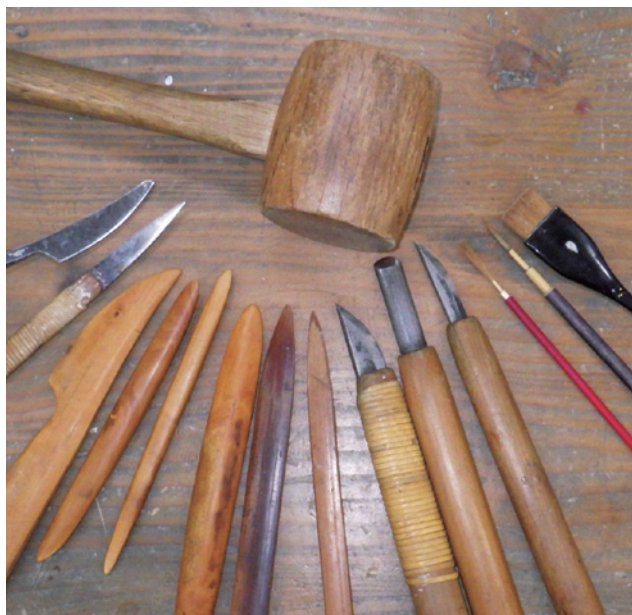


聞き手:上野由美子(右)

古代オリエントガラス研究家。UCL (ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン) 考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切り装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

——モニュメントなどを依頼されるときは、何を作ってほしいというリクエストがあるのですか？
 いえ、ほとんどは「ここに何かを作ってほしい」と依頼されます。その場所に行って、自我を排除してニュートラルな受信体になると、そこに何が必要か分かるんです。KITTE博多に作ったピンクのエンジェルポストには3つの差し出し口があります。日本で始めてなのですが、下の差し出し口は子供用です。車椅子の人にも助かると言われました。博多から離れている恋人へ、孫からおじいちゃんおばあちゃんへ、手紙を出してほしいという願いを込めています。動物園のゴリラも、土目になると、子どもたちが座って写真を撮りたいと並ぶんですよ。そういうのが大事なと思うんです。

——伝統工芸展に出品するようになったきっかけは。
 22歳の時、京都の人間国宝である林駒夫先生からかけ



道具 (左から金ベラ、切りベラ、柘植ヘラ、竹ヘラ、彫刻刀、蒔絵筆、刷毛)。



千々石ミゲル
(2013年)

られた一言が転機になりました。土の人形は伝統工芸展では入賞したことがなく、泥人形と低く見られていると思っていました。そんな時、「良いものだったら入るよ」と言われ、良い作品を作る励みになりました。

——作品は中世の西洋風の人物が多いようですが。

出展する人形を作るときも、誰かのためにという意識があります。九州には南蛮文化が各地に色濃く残っており、はるか昔に海を行き来した人々の勇気が、私たちの体の中に今なお生きています。天正遣欧少年使節のシリズをずっと作っていますが、この北部九州からヨーロッパに行った少年たちで、4人の末裔の人も周りにいらっしゃいます。そこで過去、現在の人々の祈りを人形に現し、未来に伝えようと思いました。この地に育てられた人形師としての使命と感じています。

——その関係でローマ法王と謁見されたのですか。そのつながりも大きいです。具体的には、東日本大震

災の後、美術評論家の伊東順二氏から勧められ、建築家の隈研吾さんや陶芸の人間国宝・今泉今右衛門さんらとローマのラ・ルーチェ展へ出品することになりました。その際、ローマ法王・ベネディクト16世に謁見し作品を献上することができました。

——人形作りの今後はどうなっていくと思いますか。

大学で「お人形さんね」と下に見られて悔しい思いもしましたが、時代は変わってきていますね。彫刻の先生が「どうやって作ってるの?」と聞くんです。他では廃れた鎌倉時代までの仏師の技術を、未だにぼくらは持っているわけです。木の絵付けも、焼物の絵付けもする。でかい焼物もする。多用途で柔軟な人形の技術が見直されてきて、自分たち本来の人形師の時代かなと思うこともあります。

——東京オリピック・パラリンピックも、日本文化を発信するいい機会ですよ。

ぼくらや先輩たちが古臭いと思っていたようなことでも、彫刻家の子が漆を扱ったりすると「かっこいい」と言われるんですね、今は。JAPANと西洋の融合も面白いと思います。人形作家と呼ばれるのを嫌がる作家もいますが、彫刻よりも人形と言った方がギャップがあって面白いと思うんですけどね。「工芸」が、ここ数年で海外ではKÖGEIになったように、展覧会や対外的には「Ningyo」というローマ字表記にしてみました。息子さんとお揃いのTシャツの絵柄は何ですか。

「仕事の鬼」です。「お粥を食ってでも最高の仕事をしろ」というのが祖父が作った中村家の家訓で、それを英訳し、鬼の絵とともにデザインしています。うちは何を作るとか技法を受け継ぐわけではないんですよ。何でも作っている。その代わり、貧乏してもその時代の最高の仕事をしろということなんです。

祝

2016年9月 一橋大学博士号(経営法)取得

浅川哲郎さん(取得時53歳)

【論文テーマ】米国における相続税の歴史的考察

日本で浸透したシャープ勧告の哲学が、本国で受け入れられなかった理由

■相続税が1年だけ廃止になる米国の不思議

浅川哲郎さんは、30代で米・コロンビア大学に留学し、経営学を学んだ。修了後もニューヨークやロサンゼルスでの会計事務所勤務で、日米の税制の違いに興味を持った。帰国後、コンサルティング業と並行して、九州大学大学院にて会計学の博士号を取得。さらに、マネジメントシステムに法律が与える影響を知るため、その前段階として日米の税法の違いを研究し、2つ目の博士号取得となった。

きっかけは、日本の相続税にあたる米国の遺産税が、2010年の1年だけ廃止になったこと。税額の増減ではなく廃止、しかも次の年からはまた復活する。日本人の多くは不思議に思うだろう。「税制ってそんなにコロコロ変わっていくの?」「日本よりも貧富の格差が大きい米国で、相続税を取らないと格差は広がるんじゃないか?」

日米の税制の違いは、国民の税金に対する観念や課税哲学が違うことによる。違いが特に顕著な相続税に焦点を当てて解き明かしたのが本研究だ。

■米国から来たシャープ勧告が日本の道徳に

昨年、節税目的でタックスヘイブンを利用する企業や資産家の名前が載った「パナマ文書」が世の中を騒がした。日本では、そのリストに名前が載っているだけで、違法行為ではなくとも恥すべきことのように捉えられた。一方米国では、ルールに則っている限り問題はないとする見方が多い。

「日本の税制は第二次大戦後のシャープ勧告に基づいています。シャープ博士の他にも、ノーベル賞

受賞者らを含む米国屈指の優秀な使節団が、米国の税制の問題点だった累進課税を強化し高い相続税で富の再配分を図る、当時の理想とする税制を持ち込んだのです。シャープ勧告の理念と哲学が、ある意味日本の道徳として刻まれた結果、相続税もおおむね納得を得られ大きなブレはないのです」

米国で生まれたシャープの理念は、なぜ本国では受け入れられなかったのだろうか。

■アメリカンドリームの本質とは

「米国の原点は、移民としてやって来てアメリカンドリームをめざす国です。遺産税の対象となる資産は数億円以上と限られた人ですが、自分や子孫が成功して稼いだ資産を税金として取られたくないと、楽観的に考える国民性のようなのです。経済学的には、所得税や法人税は政府の歳入の反映であると言



論文を書くことは苦ではないが、九州から東京へ6年間月に2回通うのは大変だった。財団の支援は助かったという。

えますが、人の死は歳出とは無関係で、人それぞれ死ぬ時期も違うのに、それに課税するのは不公平だという理論もあります。公平の考え方もいろいろで、私は、戦前の家督相続制度で、責任を引き継ぐ子供が他の子供より税制上優遇されたのは、むしろ合理的ではないかと評価しています」

浅川さんは九州産業大学の教授も務める。日本人は比較的従順に納税するが、歳出として正しく使われているかというチェックや議論はもっとされるべきで、研究がその一助になればという。また、一般企業にとっても、税金が企業活動に与える影響は大きく、特に海外展開を考える企業には、会計やコンサルティングの立場で関わっていく中で、また行政などを通じて支援ができればと考えている。

■トランプ政権でまた変わりそうな米国の税制

アメリカ合衆国大統領にドナルド・トランプが就任した。多くの政策において、オバマ政権の8年間とは違う方向にかじを切りそうだ。

「オバマケアで国民皆保険制度を導入したように、政府が社会福祉を充実させれば、所得税や相続税を高くせざるをえないわけです。トランプは、オバマケアの見直しを表明しており、医療保険の削減がなされ、歳出が低減する場合は、再度、相続税の抜本的な改正が検討される可能性が高くなります。

私が日本の将来に関して心配なのは、日本人留学生の少なさです。私が留学した20数年前と比べて、随分減った印象があります。いま博士号に挑戦中の方も含め、皆さん頑張ってください!」